

# 風車

紀州の歴史と文化の風

2008 冬号

# 45

財団法人 和歌山県文化財センター

特集

重要文化財金剛三昧院保存修理工事

「客殿及び台所について」

連載

埋蔵文化財課 短信

考古学の散歩道

「紀ノ川流域の古代寺院」

きのくに歴史小話

「建築彫刻の話」

「発掘屋余話」

## 重要文化財金剛三昧院保存修理工事「客殿及び台所について」

今年一月、雪深い高野山で始まった「金剛三昧院客殿及び台所ほか一基」の保存修理工事は四季を一巡し、早くも二度目の冬を迎えました。風車四〇、四二号でもお知らせした通り、今回の修理工事では、客殿及び台所の屋根葺替え、軸部の建て起こし（傾いた建物をまっすぐに直すこと）と、多宝塔の屋根葺き替えを行います。現在は客殿と台所の床や壁の解体を終え、客殿の建て起こし作業に取り掛かっています。また、虫害や腐食、風化によって傷んだ床板などの修理も行っています。修理をした部材は、建て起こしが済んだ後、元通りの位置に組み立てます。

客殿及び台所が建てられた時期は、はつきりと判らないのですが、様式などから江戸時代前期に建てられたとされています。客殿は、元々文字通り高貴な方（客）を迎えるための場で、方

丈建築の流れを汲んだ書院造風の建物です。南を正面として、南側を広縁、その北には東から「大広間」と「角の間」が並びます。「角の間」の北側には順に「次の間」、「上段の間」と続き、その北側に床が一段上がった「上段」があります。また、「上段」の西側にはさらに一段上がった「上々段」が設けられ、この建物で最も格式の高い空間となっています。「大広間」、「角の間」、「次の間」、「上段の間」には金碧の襖や張付壁（障壁画）が入り、特に「大広間」の障壁画は美術工芸品として重要文化財に指定されています。「大広間」の障壁画には二本の梅の木（紅白梅）と雉が描かれています。その内一本の梅の木は、大広間北面西端から西に向かつて低く長く枝を延ばし、L字型に繋がる西面の襖に続いています。この襖の背後にある「角の間」にも梅の木が描かれています。角の



大広間北面



上々段

\*天井に素晴らしい鳳凰の彫刻があります

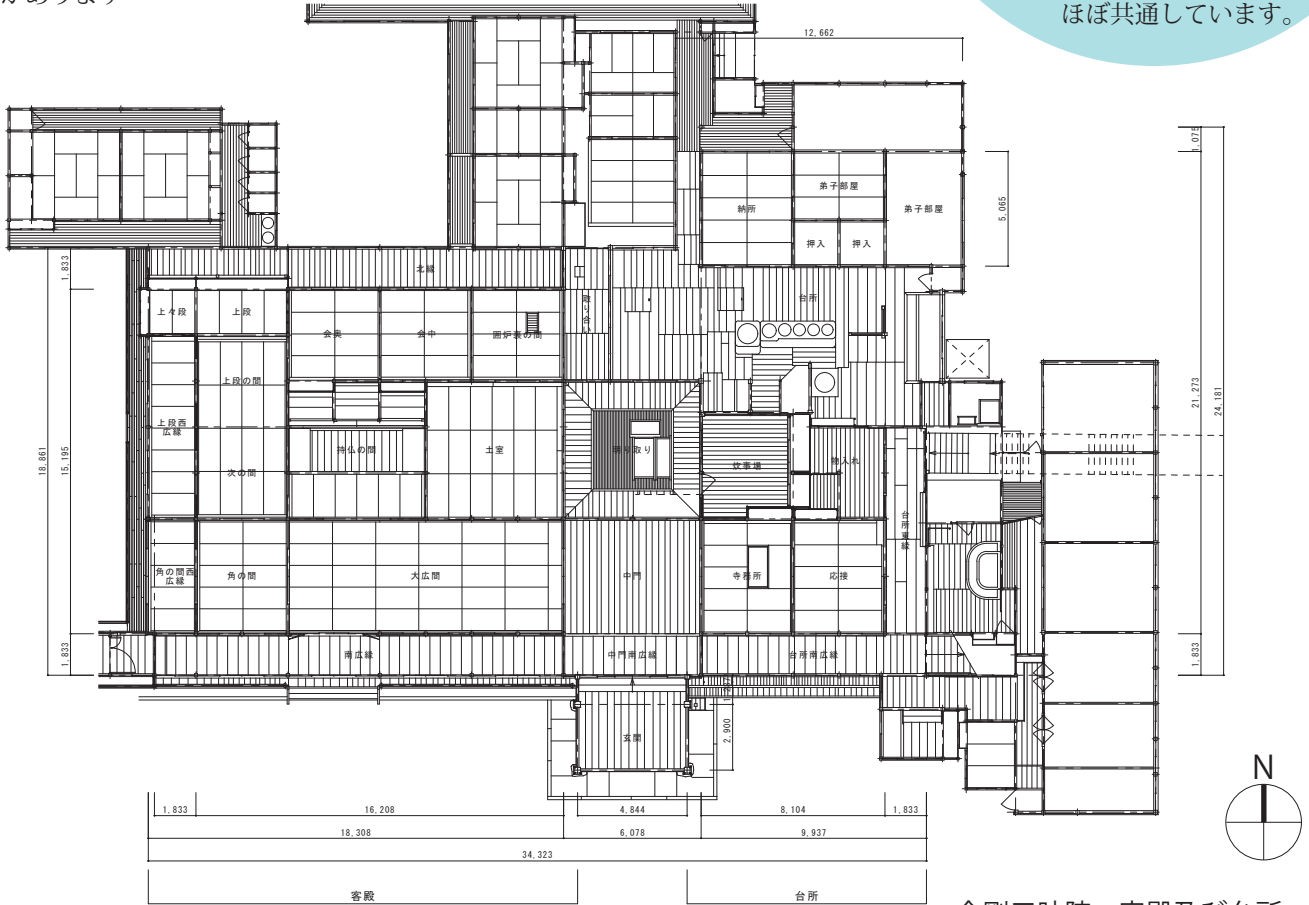


次の間から上段を見る

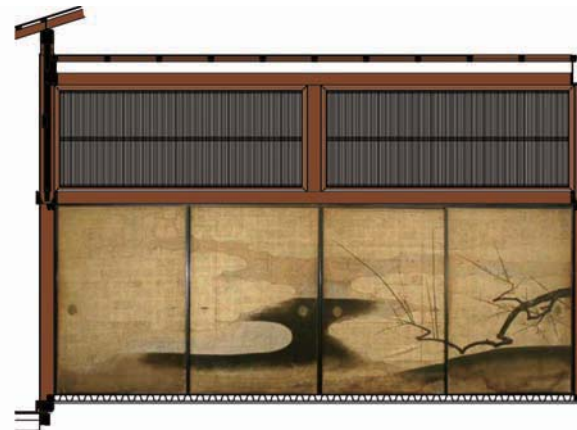
\*正面奥の上段左手に上々段があります



〈参考〉金剛峯寺大主殿の土室  
高野山内の寺院数ヶ寺に土室が現存し、その形はほぼ共通しています。



角の間と一室となった大広間 \*表紙写真と比べてみてください



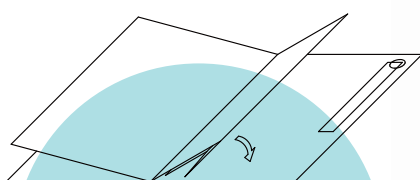
大広間西面

間」の梅の木は、大広間境の襖を開けても梅の枝が繋がる構成になっています。つまり、平常は「大広間」と「角の間」境には襖が建て込まれ、別々の空間として使用されているものが、法要など大勢が集まる時には、部屋境の襖を取り外して一室として使用することができ、どちらの場合でも絵柄が繋がるようになっていのです。これらの障壁画も傷みが激しく、建物の解体修理と同時に修理を行います。「大広間」の北側には、東から「土室の間」、「持仏の間」と並びます。土室とは、畳一畳ほどの大きさの火を焚く炉で、四方に柱が建ち、腰の高さから上の部分を壁土で塗り固めた煙道えんどうが付いたものを指します。土室は高野山独自のもので、寒さの厳しい高野山の冬を乗り切るために考案されたと言われています。残念ながら、金剛三昧院には土室は残っていないのですが、土室があったと思われる位置の天井に痕跡が残っていることと、何よりも部屋の名前を「土室」としていることから、土

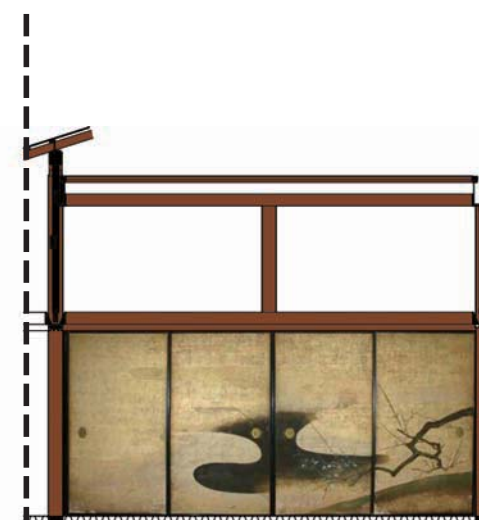
室があったことは間違いありません。「持仏の間」は各寺院が、本堂とは別に歴代住職を祀る仏間です。「土室の間」と「持仏の間」の北側には東から「囲炉裏の間」「会中かいなか」「会奥かいおく」の三室が並びます。この三室は私的性質の強い部屋で、住職の居室や客人の寝室などとして使われていました。

客殿の東側には、客殿と棟むねを直交する形で台所が建ち、その間を中庭として、南側に玄関が張り出しています。ただし、この建物が建てられた当時は玄関がなく、宝暦八年（一七五八）に建てられたことが棟札から判っています。台所は寺院の事務的な機能を持ち、また生活の場となっています。南側は天井が張られた部屋が並びますが、その北側には、天井を張らず屋根裏まで吹き抜けのダイナミックな空間をもつ「台所」が広がります。

さらに詳しいことについて、今後この紙面を通じて皆様にお伝えしていきたいと思っておりますので、楽しみにお待ちください。  
（結城啓司）



上の図のように折ると、「大広間」の絵と「角の間」の絵が繋がります



角の間北面

山折り  
②



角の間東面

山折り  
①

## 埋蔵文化財課 短信



### 田辺城下町遺跡の発掘調査

田辺城下町遺跡は、安藤氏の居城である田辺城の北東部に広がる遺跡で、江戸時代の田辺城下の一部を範囲とします。遺跡の範囲内には、弥生土器・須恵器・古銭の出土地があり、弥生時代から近世に至る遺跡であることがわかっています。

県道の改良工事に伴い、昨年度と今年度の二カ年にわたって面積約一六〇〇㎡を発掘調査し、弥生時代の墓地、中世（鎌倉・室町時代）の集落、江戸時代の町屋を構成する建物跡などを明らかにすることができました。

江戸時代の出土遺物には幕末頃の数多くの日常雑器をはじめとする生活用品があり、当時の生活を復元する資料がそろっています。町屋の様子を窺う資料としては、鉄滓や砂糖を製造する鉢が出土しており、鍛冶屋や砂糖製造所が存在したことがわかりました。

(川崎雅史)



弥生土器出土状況



砂糖製造鉢

### 水軒堤防の石垣構造

水軒堤防は、これまでの調査で高さ約四mの石垣とその背後を覆う土堤で構成されていることがわかっていますが、今回は、今年度の調査で明らかになってきた石垣の構造について紹介します。

石垣の西側（海側）は、切り出した和泉砂岩を精緻に加工・布積みしています。また石材の形状を、表面の長さに対し奥行きが二倍以上（八〇cm前後）ある細長い直方体に加工するなど、城の石垣に見られる加工・石積技術を用いることにより、強い波に耐えうる強固な構造を実現しています。

このような石垣の築造技術がベースにある一方で、水軒堤防独自の特徴も随所に認められます。石垣の隅部に丸みを持たせたり、海側の傾斜を石垣よりも緩い角度に設定するなどの構造は、波のエネルギーを逃がすための工夫と考えられます。高度な石材加工や石積技術に高い価値があることは言うまでもありません。



石垣西側全景（西から）



石垣北側断面（北から）

せんが、水軒堤防に必要な強度と機能を十分理解し、それに適した構造を作り出している点にも価値を見出すことができます。

(佐々木宏治)

# 紀ノ川流域の古代寺院 — 那賀郡の古代寺院の謎 —

富加見 泰彦

今回は那賀郡の寺院について紹介します。那賀郡は、奈良時代に紀伊国分寺が造営された地で、当時の紀伊の中心地であったと考えられます。この地に建立された白鳳時代の寺院は、紀ノ川と貴志川をはさんで対峙するように西国分廃寺、最上廃寺、北山廃寺の3寺が建立されています。共に坂田寺と同系の軒瓦を有していることでも知られています。

坂田寺というのは、<sup>くらつくり</sup>鞍作氏の氏寺で、<sup>おはりだ とゆら</sup>小墾田の豊浦寺と並んで代表的な尼寺です。推古14年(606)年、<sup>とりぶっし</sup>止利仏師の鞍作鳥が、困難と言われた飛鳥寺の金堂本尊の安置を成し遂げた褒賞として近江国坂田郡の田地20町を与えられました。鳥はこの地からの収穫を坂田寺の造営にあてました。『日本書紀』天智3年(664)12月の条に豊作の記事が見えるように、コメの収穫の多い地域だったようです。

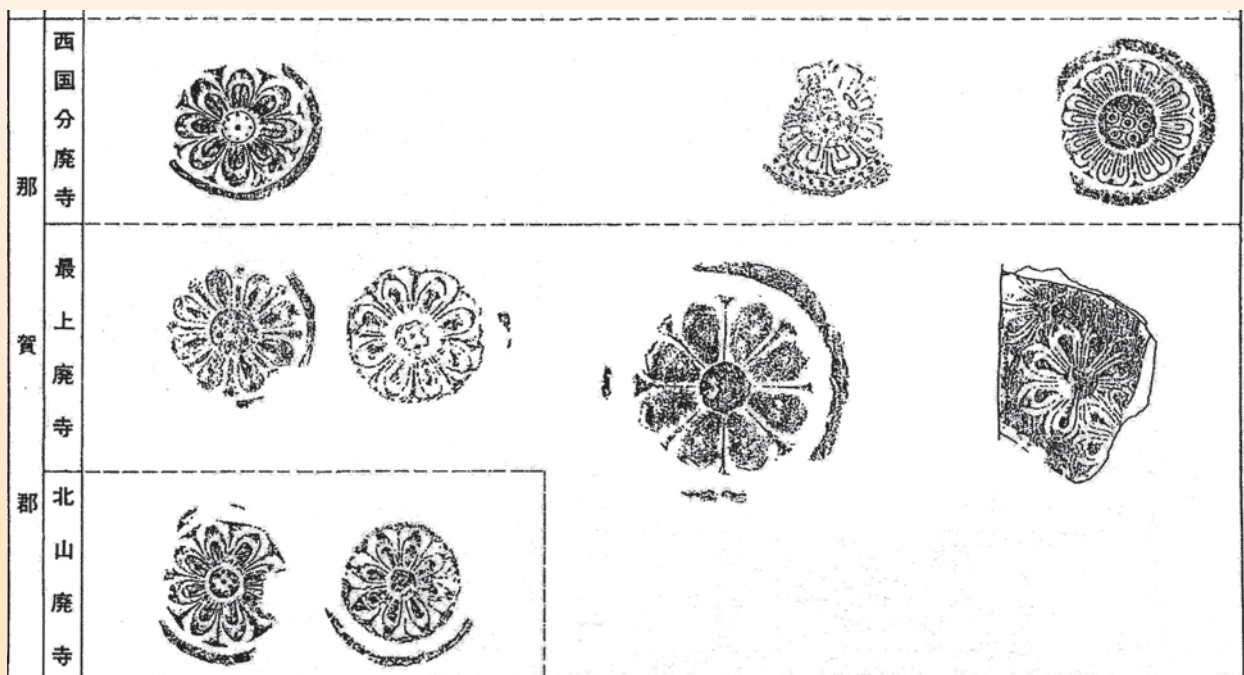
那賀郡の寺院にはいくつかの謎があります。

一つ目は、塔跡は見つっていますが、塔跡以外の主要伽藍が見つかりません。消去法でみると塔、金堂、講堂が一直線に並ぶ四天王寺式伽藍配置だと考えられますがよくわかりません。

二つ目は、坂田寺は尼寺ですが、3寺は塔跡が存在するため、尼寺ではありません。しかし、最上廃寺近くの字名が尼岡であること。同じく北山廃寺近くにも尼寺という大字名があること。時代はやや下りますが西国分廃寺は国分尼寺であったといわれていることなど共通する点が多く、なにか示唆的ではあります。

三つ目は、軒を飾る軒丸瓦は発掘調査でも確認されていますが軒平瓦が出土していません。平瓦を2枚重ねて軒先の瓦としたとも考えられます。

今年度に、圃場整備に伴って北山廃寺が発掘調査されます。謎の一端が解明されることを大いに期待しています。



那賀郡3寺の軒丸瓦

# きのくに歴史小話

れきしこばなし

## 建 築彫刻の話

③

今回は、和歌浦天満神社本殿の脇障子彫刻を紹介します。「太鼓と鶏」です。太鼓の上に雄鳥が悠然とたたずみ、その下で雌鳥とひな鳥が群れ遊んでいる光景が実に写實的に彫り出されています。

これは中国故事「諫鼓苔むす」を題材としたものです。諫鼓は古代中国で、王をいさめようとする者に打ち鳴らさせるために城門の外に置いた太鼓のことです。善政が行き渡っているために、太鼓は使われず、苔むし、臆病な鶏も群れ遊んでいる、つまり世の中がよく治まっている天下太平の喩えです。

天満神社は慶長十一年（一六〇六）当時の紀州藩主淺野幸長よしながによつて建てられました。「諫鼓苔むす」の脇障子彫刻は、戦乱の世を生き抜いた幸長の紀州統治にかける決意を表しているように思えるのですが、いかがでしょうか。

（鳴海 祥博）



和歌浦天満神社本殿 脇障子

## 発 掘屋余話

③

発掘屋の文章力

現地での発掘調査が終わったあと、土器などの出土遺物を整理し、それらを分析・考察した上で、『発掘調査報告書』なるものをつくる。考古学に興味のない方には、無味乾燥なものかもしれないが、注意してよく見ると、けっこう面白い。中にはときどきとんでもないものがある。

某北陸のある県の報告書で、古墳の石室内部から見つかった人骨について述べた件。曰く、「成人のものであるが、性別については不明。男性もしくは女性と思われる。」「……?!」うーん、思わず「オカマの骨つてのが、あるのかよ」と、突っ込みをいれてしまいましたね。

もうひとつ。これは近畿のある県。経塚の発掘調査の中で、その埋納状態を説明した箇所です。経塚というのは、お経を納めた容器を陶製などの外容器に入れ、さらにそれを地中に埋納するものですね。その上に石などが置かれていたりする。平安時代の終わり、末法の世に盛行したものです。その説明文に曰く。「直上に人頭大の巨石が置かれていた。」いったいどんな頭なんでしょね。ぼくは、53cmしかありませんけど。

これもある県でのこと。古墳から出土した埴輪についての説明。幸い報告書ではなく、簡単な文章でしたけど、やってくれました。太刀を帯びた武人の埴輪について「佩刀はいとうを腰に携えた武人形埴輪云々。」「佩”は腰に帯びた状態を意味する語。いわゆる馬から落馬の類でしょう。こういうのを見るにつけ、文章力の必要性を痛感します。考古学もいよいよ国語もね。

（村田 弘）



# 催し物案内

和歌山県内の文化財関係イベント情報

## 県立紀伊風土記の丘

### 特別展「岩橋千塚」

期 間：平成20年12月2日（火）～平成21年2月22日（日）

主 催：県立紀伊風土記の丘 <http://www.kiifudoki.wakayama-c.ed.jp/>

### 新春企画展「ウシの歩み 一のんびり眺める歴史一」

期 間：平成20年12月20日（土）～平成21年1月12日（祝・月）

主 催：県立紀伊風土記の丘

### 冬期企画展「紀ノ川の考古学・民俗学」

#### 第一部「紀ノ川流域の弥生時代」・第二部「紀ノ川の農業近代化」

期 間：平成21年1月24日（土）～3月15日（日）

主 催：県立紀伊風土記の丘

共 催：財団法人和歌山県文化財センター <http://www.wabunse.or.jp>

## 和歌山県立博物館

### 企画展「根来寺の“内”と“外”」

期 間：平成21年1月31日（土）～3月8日（日）

主 催：和歌山県立博物館 <http://www.hakubutu.wakayama-c.ed.jp/>

## 和歌山市立博物館

### 特別陳列「歴史を語る道具たち」

期 間：平成21年1月6日（火）～3月8日（日）

主 催：和歌山市立博物館 <http://www.wakayama-city-museum.com/>

8

催し物案内

「発掘屋余話」

「建築彫刻の話」

7

きのくに歴史小話

6

「紀ノ川流域の古代寺院」

5

連載コラム 考古学の散歩道

2

埋蔵文化財課 短信

1

「客殿及び台所について」

2

特集 重要文化財金剛三昧院保存修理工事

1

表紙 重要文化財金剛三昧院大広間

目次

## 現場事務所一覧

旧中筋家住宅保存修理事務所

和歌山市禰宜 148 TEL:073(477)5969

金剛三昧院保存修理事務所

高野町高野山 425 TEL:0736(56)5578

京奈和自動車道遺跡関連発掘調査事務所

・中飯降遺跡発掘調査事務所

TEL:0736(22)2534

・西飯降遺跡発掘調査事務所

TEL:0736(23)2252

・重行遺跡発掘調査事務所

TEL:0736(77)7807

県指定史跡水軒堤防発掘調査事務所

TEL:090(3276)8475

藤並地区遺跡発掘調査事務所

TEL:0737(52)8267

北山廃寺・北山三嶋遺跡発掘調査事務所

TEL:0736(64)2299

調査事務所

きのくに歴史探訪館

海南市築地 1-7

TEL:073(483)4277

風車 45 (2008冬号)

平成20年12月15発行

(財)和歌山県文化財センター

〒640-8404

和歌山市湊571-1

TEL:073(433)3843

FAX:073(425)4595

E-mail:maizou-1@wabunse.or.jp

URL <http://www.wabunse.or.jp>